

## 高齢者福祉施設における実践的な火災安全思想の啓発・教育活動

老人福祉施設の避難安全に関する研究会 殿

## 選定理由

本啓発・教育活動の特徴は、わが国での高齢化により年々増加している高齢者福祉施設における火災と死者数の増加や、スプリンクラー設備のない小規模施設の火災の頻発など、火災安全性に関連する数多くの問題点を背景として、施設の運営者と関係職員に対してこれまでにない実践的な火災安全思想の啓発・教育を行ってきたことにある。これらの活動は、特定の個人によるものではなく、特定非営利活動法人日本防火技術者協会により設置された「老人福祉施設の避難安全に関する研究会」のメンバーにより組織的に行われてきた。

本活動においては、高齢者福祉施設を取り巻く課題を整理したうえで、なかでも全員救助の戦略の欠如と職員による非常時の対応力不足などを克服するため、2008年度より都道府県単位で防火研修会を計7回行うとともに、各施設視察と同時に進行出前講座などを通して、啓発・教育活動が行われてきた。これらの活動には、多くの施設職員が参加し、教育の効果が上げられている。

本活動において特に評価すべきは、教育的効果が高いと考えられる創意工夫に溢れた数多くの教材の開発である。事前に施設の立地条件と利用実態の分析、アンケート調査、訓練の実態調査、施設の問題点の

整理などを行ったうえで、施設の特徴・特異性を考慮した「防火・避難マニュアル」、図上で職員全員が自らの施設に見合った解決手段を考えるためのゲーム教材である「火災図上訓練(FIG)マニュアル」、施設固有の問題を考慮した避難時の基本行動を記した「防火・避難訓練マニュアル」、火災の恐ろしさをうまく伝える視覚教材の「防火・避難訓練教材」など、多くの効果的教材を開発している。

一方、高齢者施設用の自動解錠システムなどのハードの開発なども行っており、今後の技術展開に結び付ける活動も行っている。

本活動の特色は以上のとおりであるが、一連の活動は非常に社会的意義の高いものであり、老人福祉施設の火災被害を実践的な火災安全思想の導入によって未然に防止し、より防災力の高い施設運用を可能にしたことは、高く評価できる。

本来、これらの活動は特定組織の研究会が担うべきものではなく、行政や公的機関の役割とも考えられるが、行政任せでは解決しない喫緊の社会的問題に対して、自ら関係者の啓発・教育活動に尽力したことは、社会的に大きな意義を持つと言える。

よって、ここに日本建築学会教育賞(教育貢献)を贈るものである。

## 受賞所感

このたびは、2014年日本建築学会教育賞(教育貢献)という栄えある賞を賜り、誠にありがとうございます。受賞の所感に替えてこのチーム活動の特徴について紹介させていただきたいと思っております。

この活動は、NPO法人日本防火技術者協会(2003年東京都知事認可)が目指す「防火技術者と市民の協働によって広く市民防災の立場で社会貢献すること」の諸活動の一環として、近年増加傾向にある「高齢者施設における夜間火災による死傷者の低減を目的」として2008年から実施しているものです。

この活動チームは、ボランティア活動による目的達成型横断的な集まりで、大学教員(青木義次、大西一嘉、小林恭一、関澤愛、建部謙治、村井裕樹)、ゼネコン・設計事務所の元研究者・実務者(笠原勲、栗岡均、佐藤博臣、富松太基)、関係行政機関・消防機関(仲谷一郎、青木浩)、防災設備メーカー・コンサルタントの実務者(堀田博文、山村太一、宇山幸逸)など、建築火災安全を実現するのに関与する多面的な専門知識と見識を持つメンバーで構成し、現在も活動を継続しています。このチームの主力は、まもなくこのような施設のお世話になる年齢に近い60歳以上の活力のあるシルバー世代がメンバーで、一部の若い人たちの協力を得て、自分の問題として活動を進めてきました。このことも大きな特徴であると思っております。

毎月1回定期的に研究会では、7回の防火研修会や17施設での出前講座などにおいて、施設関係者との直接の対話やアンケートなどで見いだされた課題を検討し、彼らがどのような課題に直面しているか、何を欲しているのかに関する情報を集め、分析しました。このような双方向のやり取りを経て、知識を高めるための「防火教材の作成や基本戦略のマニュアル」、知識を知恵にするための「図上演習マニュアル」、目的を明確にした行動力を鍛える「訓練マニュアル」などを作成しました。

活動当初は、入所予定者の火災安全の視点からの施設選びのポイントの小冊子や施設管理者のためのチェックリストの作成など、主としてメンバーの頭のなかで考えた火災安全のポイントを発信しました。火災安全については専門家ではあるもの、施設の利用実態などはまったく素人の作成したたたき台をもとに、東京都社会福祉協議会の協力を得て防火研修会や出前講座の開催を行いました。

また、施設関係者の出費を安くおさえるために、一部のメンバーの所属する東京理科大学のグローバルCOEの活動の一環として東京神楽坂の森戸記念館を借りて防火研修会を実施できたことも、活動を継続できた大きな理由と思っております。関係各位にこの場を借りてお礼申し上げます。

2011年度からは笹川科学研究助成や鹿島学術振興財団研究助成などを受けました。その結果、それまで東京都内にとどまっていた防火研修会や出前講座を、関西(枚方市・神戸市)、九州(熊本市)、北海道(札幌市・小樽市)など異なる地域特性の施設の見学や幅広いご意見を承ることができました。特に、東京では当たり前の対策として考えていたバルコニーへの火災時避難について、雪国の施設を降雪期に見学し、避難困難性を目の当たりにしてカルチャーショックを受け、急遽マニュアルの書き換えを行ったのも苦い思い出のひとつです。現場にこそたくさん課題とその解決策が埋まっていることをあらためて認識させられました。

最後に、この活動は地道に継続し、今後も多数の地域の多数の施設を訪問し、個別の課題を解決するための方策について、特に火災安全上の弱点の多い小規模化・多様化施設のあり方の検討、施設の入居者や介護職員の実態と乖離した関連法規に準拠する短絡的な現状の設計方法の改善に資する設計資料の整備なども進めたいと考えております。

(文責:佐藤博臣/研究代表:NPO法人日本防火技術者協会理事、ビューローベリタスジャパン(株))